

2017年 2月 8日

北九州市長
北橋健治 殿

DOCOMOMO Japan

代表 松隈 洋



八幡市民会館の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

本会は、20世紀の建築と環境遺産の価値を認め、その保存活用を提唱することを目的の一つとする国際的な学術団体 DOCOMOMO (Documentation and Conservation of buildings, sites and neighbourhoods of the Modern Movement=モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織) の日本支部です。

貴市におかれましては、北九州市八幡東区尾倉2丁目6-5に位置いたします八幡市民会館の建物が解体の危機にあること、新聞等の報道により聞き及んでおります。

八幡市民会館は、旧八幡市(現・北九州市)の戦後復興事業と八幡市制40周年を記念して1958年(昭和33)年に竣工したもので、設計者は少年から青年時代を八幡で過ごし、後に文化勲章を受章した日本を代表する建築家、村野藤吾(1891-1984)です。その建物は下記に記したとおり、戦後の日本における歴史的建築として高い価値を持っています。

こうした建物は、機能に応じた整備や構造体の補強によって長寿命化を図り活用していくことが、建築資源の有効活用の視点からも求められております。貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、当該建物の保存活用を図るための方途を積極的にご検討の上、推進されますよう、お願い申し上げます。なお DOCOMOMO Japan は、この建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

八幡市民会館についての建物の概要や保存活用すべき価値は、以下の通りです。

1) 建築の概要

福岡県北九州市八幡東区尾倉2丁目6-5に位置する八幡市民会館は、1958年に竣工しています。設計者は村野・森建築事務所(村野藤吾)、設計監理は八幡市建築部建築課、施工は清水建設です。建物は、竣工当時1750席(後に約1450席に改修された)を備えるホールからなる「市民会館」と、その西側に接続する南北に細長い建物「美術工芸館」の、異なる名称の2つの施設の複合として建設されました。「市民会館」は地下1階、地上4階建

ての鉄骨鉄筋コンクリート造、「美術工芸館」は地下1階、地上1階建ての鉄筋コンクリート造です。「市民会館」と「美術工芸館」を合わせた竣工当時の敷地面積は9,810㎡、延床面積は約5,520㎡となります。以下、旧称の「市民会館」と「美術工芸館」を合わせて「八幡市民会館」と呼ぶことにします。

八幡市民会館は、建設から60年近くが経過しています。その間に、設備系を中心に幾度かにわたって改修が行われたようですが、よくメンテナンスが行われ、外観からインテリア、家具にいたるまで、全体として竣工当時の姿をよく残しています。また建設から50年以上が経っており、歴史的な価値も有しています。

八幡市民会館は、日本における最初期の市民会館の建物です。建設当初より建築作品として高い評価を受けており、1960年には、建築主と設計者と施工者の三者による理解と協力に基づいた優れた設計および性能を持つ建物に対して贈られる第1回BCS賞を受賞しています。またその後、日本建築学会が編纂し全国の重要な建築を選定し地域ごとにまとめた書籍『総覧日本の建築 9 九州・沖縄』（新建築社、1988年）に掲載されています。これは、日本建築学会が日本の建築文化にとって重要な建築として認定したことを意味しています。そして2015年には本会が、日本を代表する優れたモダニズム建築として、八幡市民会館を選定しております。

八幡市民会館の設計図面資料については、村野藤吾によって作成されたものが、京都工芸繊維大学美術工芸資料館に約100枚収蔵されています。2005年に同館で開催された第7回村野藤吾建築設計図展では、その一部が展示され、『村野藤吾建築設計図展カタログ7』（京都工芸繊維大学美術工芸資料館発行）にも記録されています。また2015年には、東京の目黒区美術館で開催され1万数千人もの入場者を得た「村野藤吾の建築—模型が語る豊饒な世界—」展でも、これらの資料が展示されていました。このことは、八幡市民会館の建物の歴史的、文化的価値が近年、高い評価を受け、全国的に認識されつつあることを意味しています。

2) 建設経緯

八幡市民会館の建設は、当時八幡市（現・北九州市）の市長であった守田道隆が主導して実現したものです。守田は京都帝国大学工学部土木科を卒業し、戦中の1942年に日本製鉄八幡製鉄所に就職。1944年から八幡製鉄所の土木部長や工務部長を歴任し、終戦を迎えています。そして1947年に八幡市長となり、1959年までの12年間に渡って市長を務めました。

在任中、守田は第2次世界大戦末期の空襲により壊滅的となった八幡市の、複数の復興事業や都市計画を成し遂げましたが、その一つが現在のJR八幡駅前から八幡市民会館までの区間の整備や都市計画です。また八幡市は、戦前より八幡製鉄所関係者の「勤労者」の街でしたが、守田市長は「勤労者」の福祉や文化のための施設建設にも力を注ぎました。とり

わけ公民館（後の市民会館を含む）の建設を重視し、その方法は「八幡方式」と呼ばれ、八幡市は「都市公民館発祥の地」とまで言われました。病院建設や美術館建設も積極的に進めました。こうして守田は、八幡の戦後の都市計画や社会教育、社会福祉、文化事業などを主導し、大きな功績を遺したのです。

八幡市民会館の建設も、守田市長の功績の一つです。守田によれば、1936年に市民会館の建設計画が生じたようですが、戦時体制下により断念した経緯があり、「八幡市に市民集会の場所として公会堂を建設するという事は市制施行以来多年の宿願であ」ったとのことです（『八幡市民会館 八幡市美術工芸館 落成記念』（竣工記念パンフレット）、1958年10月18日）。加えて、この建物が「八幡市民の殿堂として広く全市民に親しまれ愛されてその福祉と文化の向上のため最も有意義に活用されることを希って止まない、としています。守田市長の市政の象徴として建設されたと言えるでしょう。

八幡市民会館の建設までの具体的な経緯は、次のようなものです。1956年10月に市制40周年記念事業の一環として大ホール建設計画が企画され、翌1957年1月に民間団体が結集して「八幡市民会館建設促進委員会」が結成されました。同年3月末にはアメリカのアジア財団より「美術工芸館」の義援金600万円贈呈が決定。また「市民会館」建設の予算が議決します。同年4月には「市民会館」の設計を村野藤吾に委嘱し、本格的な設計が始まります。同年8月に「市民会館」建設のための市民や民間企業からの募金活動が始まり、同年11月に「市民会館」の建設と合わせて「美術工芸館」が建設されることが決定し、予算が議決します。1958年2月に清水建設に工事が発注されて建設工事が始まり、同年10月に「市民会館」と「美術工芸館」の複合施設としての八幡市民会館が竣工しました。市民や民間企業からの募金、アメリカの財団による寄附などにより実現した、かけがえのない建物であることが分かります。

3) 建築史学上の価値

3-1) デザイン的価値

八幡市民会館は、中央部の茶色い壁面の大きな建物と、その西側に建つ南北に細長い建物との組み合わせからなっています。装飾を排除し合理性や機能性を追求した、いわゆるモダニズムの方法によるデザインです。そこには時代の課題に答えたデザインと村野ならではの個性に満ちたデザインの両者が見られるのが特徴です。

建物は、1955年に移設されて開業した現在のJR八幡駅とその南に聳える皿倉山を一直線に結ぶ駅前大通りの南端部に建っています。建物の前面には大きな広場を備え（長く駐車場として使われていた）、その広場から建物の主玄関がある地下1階に容易にアクセスできるように設計されています。またその広場からスロープでホールに直結する建物の1階にアクセスできるようにもなっており、建物と広場とが一体的にデザインされていることに大きな特徴があります。

これは、この当時の庁舎や市民会館など公共建築によく見られる形式で、市民が建物にアクセスしやすい、「開かれた」建物となっていると言えます。戦後の民主主義体制下の公共建築に特有のものであり、この時代ならではのデザインだと言えます。

一方で、八幡市民会館には、設計者の村野藤吾独自のデザインも見られます。建物はモダニズムの方法に基づいた、装飾を持たない抽象的な形態でデザインされています。そして、ホール部分は宙に浮いたように見え、壁面は風船のようにふっくらと膨らみ、屋上には薄い屋根が載るといって、重力を感じさせない軽快でモダンなデザインに特徴があります。

ところが同時に、建物は全体に線対称の構成を持ち、ホール最上部は大きく軽快な屋根で覆われています。その下には八幡製鉄所の鉄を想起させる茶色いタイルで覆われた重々しく見えるホールの建物があり、最下部には列柱が並ぶ地下1階部分がしっかりとした「基壇」があるという、三層構成からなっています。線対称と三層構成は、ヨーロッパのギリシア神殿以来の伝統的な様式建築に見られる特徴で、近代のモダニズムが批判し乗り越えようとしたシンボリックなデザインです。また建物の内部には、凝った階段の手摺やピアノの鍵盤をモチーフとした装飾的なレリーフも設置されています。

すなわちこの建物には、モダニズム建築の抽象的で軽快で「開かれた」建築としての特徴と、モダニズムが批判し乗り越えようとした対象である伝統的な様式建築特有の重厚でシンボリックかつ装飾的という特徴の、相反する2つの特徴が共存しているわけです。こうした両義的なデザインは、村野藤吾に特有のものであり、機能主義や合理主義だけで測ることのできない豊かなデザインだと言えます。

3-2) 村野藤吾の作品としての価値

八幡市民会館の設計者である村野藤吾は、現在の北九州市と縁の深い建築家です。村野は1891年に佐賀県に生まれましたが、少年期から青年期までを現在の北九州市で過ごしました。1910年に小倉工業学校（現・小倉工業高校）を卒業後、八幡製鉄所に勤務しています。その後は陸軍を経て早稲田大学に入学しました。1918年に早稲田大学建築学科を卒業後、渡辺節が主宰する大阪の渡辺建築事務所に入所し、それ以来大阪を拠点としました。

1929年には渡辺建築事務所を退所して大阪に村野建築事務所を開設し（1949年に村野・森建築事務所に改称）、商業施設やオフィスビル、住宅、学校施設、美術館など、全国各地で数々の建築の設計を手掛けています。その建築作品は日本建築学会賞や日本芸術院賞、BCS賞などを受賞しています。また村野は、1955年には日本芸術院会員となり、1967年には文化勲章を受章するなど、日本を代表する建築家としてよく知られています。日本建築家協会会長、イギリス王立建築学会名誉会員、アメリカ建築家協会名誉会員としても活躍しました。

村野が設計した建築は、国の文化財に指定されているものが多いのも特徴です。2005年には宇部市渡辺翁記念会館（1937年竣工）、2006年には広島世界平和記念聖堂（1953年

竣工)、2009年には村野が増築部分の設計を担当した東京の高島屋東京店(1952・54・63・65年竣工増築)が、それぞれ国の重要文化財に指定されました。また2009年には、村野が修復および改修設計を担当した迎賓館本館(旧赤坂離宮/1909年竣工/1974年修復改修)が、近代の建物として初めて国宝に指定されています。同時代の建築家としては、最も数多くの建築作品が重要文化財などに指定されています。このように、近年村野藤吾の建築作品は、文化財としての価値が高く評価されています。

一般に村野は、商業施設やオフィスビルなど、いわゆる民間の建築の設計を数多く手掛けた建築家として知られています。しかし、戦後を中心に、村野の建築作品の全体の中では比較的少ないものの、市庁舎や市民会館など複数の公共建築の設計を担当しています。八幡市民会館以外の代表的なものとしては、八幡市立図書館(1955年/解体済み)、米子市公会堂(1958年)、小倉市立中央公民館(1959年/解体済み)、横浜市庁舎(1959年)、尼崎市庁舎(1962年)、愛知県森林公園センター(1965年/解体済み)、宝塚市庁舎(1980年)など、地方都市の重要な公共施設が挙げられます。

その中でも八幡市民会館は、前述したように、当時の八幡市長守田道隆の主導により実現したのですが、村野が設計を担当することになったのは、「御地(注:八幡市のこと)出身の故をもちまして市長より設計の御下命をうけ」たからだということです(『八幡市民会館 八幡市美術工芸館 落成記念』(竣工記念パンフレット)、1958年10月18日)。村野がかつて居住していた街という強い縁や、当時の市長による八幡市の戦後復興と都市計画を実現する形で建設された建物であり、村野としても思い入れの深い建物だったと考えられます。

このように八幡市民会館は、設計者の村野藤吾の建築作品として比較的数少ない公共建築の1つであり、また八幡市との深い縁の中で実現した、希少性の高い建物です。また、そのデザインは、1950年代の村野ならではの、軽快なモダニズムの方法に基づきながらも、様式建築のような特徴をも備えたものとなっているのです。

3-3) 北九州の街から見た価値

現在の北九州市には、村野藤吾が設計した建築作品が複数建てられ、そのいくつかが現存しています。

戦後建設されたものとしては、八幡市民会館のほか、八幡市立図書館(1955年/解体済み)や小倉市立中央公民館(1959年/解体済み)、八幡信用金庫本店(現・福岡ひびき信用金庫本店/1971年)があります。また戦前には、八幡製鉄所(現・日鉄住金ロールズほか)の3つの建物が村野の設計により建てられたことが判明していますが、そのうちの1つロール旋削工場(現・ロール加工工場/1941年)は、2016年の末に初めて現存が確認され、新聞紙上で大きな話題となりました(『朝日新聞』2017年1月9日朝刊)。

したがって現在、北九州市には3つの村野作品が現存しています。東京や村野が拠点と

した関西以外の地方都市で、これほど複数の村野の作品が集中して建てられ、現存している街は数少ないと言えます。それは、村野が八幡で少年期を過ごしていたことや、八幡製鉄所に勤務していたことなど、村野が北九州市と縁が深いためですが、いずれも北九州市の街の歴史にとって重要かつ象徴的な建物です。

北九州市は、近代に入り、八幡製鉄所の設立によって急速に発展した街です。八幡製鉄所は、現在の北九州市の歴史と繁栄ぶりを物語る象徴的な施設ですが、その建築物の設計を村野が担っていたわけです。また戦後の八幡市立図書館や八幡市民会館は、戦後の八幡製鉄所の繁栄を背景として、守田市長が主導した戦後復興の象徴として建設された建物です。いずれも、近代における八幡市や北九州市の繁栄と歴史を物語る建物であり、北九州市にとって極めて重要なものです。そして戦前と戦後のこれら 3 つの建物が合わせて現存していることに、高い価値があります。

その中でも八幡市民会館は、守田市長が戦後復興として主導した八幡駅前の整備地区の最も象徴的な位置に建っています。都市景観という観点から見ても、戦後の北九州市の歴史を物語る重要な建物だと言えます。

4) 期待される活用

前述したように、八幡市民会館は、同時代に特有のデザインを持ち、また設計者の村野藤吾ならではのデザインが見られます。そして竣工後 50 年以上経っています。高い歴史的かつ文化財的な価値を有する建物だと言えます。このような優れた建物が失われるようなことがあっては、北九州市のみならず、我国の建築文化にとっても大きな損失です。

八幡市民会館のような鉄筋コンクリート造の建物は、修復や改修、補強などを行いながら活用し使い続けるのが、近年の世界的な潮流となっています。世界遺産の登録などを行うユネスコ (UNESCO) の諮問機関であるイコモス (ICOMOS) は、2011 年 6 月に「マドリッド・ドキュメント」を採択しましたが、その中で、鉄筋コンクリート造の建築を中心とした 20 世紀の歴史的・文化財的建築について、「リビング・ヘリテージ」という概念を提示し、積極的に活用し使い続けていくことによる建物の保存を提言しています。

こうしたことを背景として、近年では、優れた改修により、使い続けられている近代建築が増えています。八幡市民会館と同様、村野の設計によるホール建築を改修しながら使い続けているものとして、宇部市渡辺翁記念会館 (1937 年) と米子市公会堂 (1958 年) が挙げられます。

宇部市渡辺翁記念会館は、1999 年に DOCOMOMO Japan が日本を代表する優れたモダニズム建築として選定した後、2005 年には村野藤吾の建築作品として初めて国の重要文化財に指定されたものです。1990 年代に大規模な改修が行われましたが、歴史的価値を損ねないように慎重に行われ、現在も美しい姿を留め、市民から親しまれ、宇部市の街のシンボルのような存在として、現在もよく利用されています。

米子市公会堂は、八幡市民会館と同じ年に竣工した建物です。そして八幡市民会館と同様、公会堂の建設が長年の念願で、米子の市民の募金活動などが実ってようやく実現した建物です。2009年に建物の耐震性が低いことが判明しましたが、存続を求める市民の声もあり、大規模な耐震改修が行われ、2014年に竣工しました。耐震性向上のために屋根を中心に大きく改修したものの、オリジナルの姿がしっかりと守られており、今も竣工当時のままの姿で建っています。やはり市民から親しまれ、現在もよく利用されています。

このような、建物の歴史的、文化的価値を損ねないように耐震性や機能性を改善しながら保存活用されている事例は、村野藤吾の建築作品に限らず、近年、全国各地で増えています。八幡市民会館は、とりわけ村野との縁の深い街に建つ建物です。しかも竣工当時の機能を大きく損なうことなく、つい最近まで使い続けられ、高い歴史的文化的価値を維持しています。今後も、建物が持つ歴史的、文化的価値を保存・維持しながら、機能性や耐震性を高め、活用されることが望ましいと言えます。

多角的なご検討と叡慮により、八幡市民会館の保存と活用が計られるよう切望いたします。